チャイナタウンはもはや“チャイナタウン”ではない！“外国人労働者の街”だ！
――クアラルンプルの＜ツーリズムスケープ＞瞥見――

Chinatown is no longer “Chinatown”!
Chinatown has changed into the “Foreign Workers’ Town”!:
A Glimpse of “*Tourismscape*” in Kuala Lumpur

藤巻　正己*

要　約

この小論は、マレーシアの経済社会が外国人労働者によって成り立っているという現状について、首都クアラルンプルの観光において最も人気のあるチャイナタウンの＜ツーリズムスケープ＞（tourismscape）を、遊歩者（フラヌール）（flâneur）的目線を通して描き出すことを目的としている。そして、ますます激化する労働力のトランスナショナルな移動とツーリズムのグローバル化の進展とによって、今や、観光の現場では、＜ホスト＞と＜ゲスト＞の二面性を帯びた外国人労働者の介在によって、これまでの＜ホスト／ゲスト＞論を超えた実態があることについて言及するものである。

Abstract

This article aims to depict the current situation of Malaysia’s tourism and hospitality sectors that it is essentially underpinned and sustained by foreign workers, considering the “tourismscape” of Chinatown, which is most popular

＊立命館大学文学部特命教授

for tourism in Kuala Lumpur, through a flâneur perspective. In this paper it will refer to the fact that the mediation of foreign workers who acquire a dual nature as both hosts and guests in tourist areas has now superseded the host–guest relationship theory of the past. This is mainly due to the increasingly intense transnational migration of labor, as well as the globalization of tourism.

キーワード：ツーリズムスケープ、外国人労働者、チャイナタウン、クアラルンプル

Key words：tourism scape, foreign workers, Chinatown, Kuala Lumpur

Ⅰ　インバウンドツーリズムに沸くマレーシア

1990 年代以降、マレーシア政府は観光立国を目指し、”Visit Malaysia Year” や “Malaysia: Truly Asia” キャンペーンを打ち出すなど、積極的な観光戦略を通して、製造業に次ぐ外貨獲得源として観光産業の振興に取り組んできた。その結果、1987 年にわずかに 336 万人であった同国への外国人訪問者数は、2017 年には 2595 万人（世界第 15 位）にまで増大をみた（UNWTO 資料による）。第 1 表にみるように、同国を訪れる外国人の送り出し国は、かつてマレーシアと同じくイギリス領マラヤの一部を成し 1963 年から 65 年まではマレーシア連邦を構成した隣国のシンガポールや、インドネシアなどの ASEAN 諸国、中国、インド、日本といったアジアの国々が多数を占めるとはいえ、イギリス、オーストラリア、そして中東諸国など世界各地からの旅行客も訪れる国際観光地へと発展をとげるに至った。

マレーシアの観光地は島嶼、高原、農村、都市など全国各地に広く分布しているが、国際空港が所在する首都クアラルンプル（以下、KL）やマラッカ海峡の北の出入口にあたるペナン（島）を主たる玄関口として、空路・陸路・海路網によって半島部マレーシアのみならず、ボルネオ島の東マレーシア全

第 1 表　マレーシアへの訪問者数の推移（上位 10 位）

順位	2017 年（万人）		2012 年（万人）		2007 年（万人）	
1	シンガポール	1,244.2	シンガポール	1,337.3	シンガポール	1,049.3
2	インドネシア	279.7	インドネシア	238.3	インドネシア	180.5
3	中国（香港含む）	228.2	中国（香港含む）	155.9	タイ	162.3
4	タイ	183.7	ブルネイ	125.8	ブルネイ	117.2
5	ブルネイ	166.1	タイ	123.6	中国（香港含む）	78.4
6	インド	55.3	インド	69.1	インド	42.2
7	韓国	48.5	フィリピン	50.9	日本	36.8
8	日本	39.3	オーストラリア	50.8	フィリピン	32.7
9	フィリピン	37.1	日本	47.0	オーストラリア	32.0
10	イギリス	35.9	イギリス	40.2	イギリス	27.6
総計		2,594.9		2,503.3		2,097.3

（出典）各年度の UNWTO 報告書による。
シンガポールが一貫して 1 位（全体の約 5 割）を占め、シンガポールを含む ASEAN 諸国が占める割合は 70％強である。近年は日本やイギリス、オーストラリアに代わり、中国・インドからの訪問者数が増加傾向を示している。また、上表では確認できないが、2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ以降、中東イスラーム諸国からの訪問者も増え、とくに 7 月から 9 月の期間、マレーシアにおける観光の現場では存在感をみせている。

国各地の観光地と結ばれており、辺境の密林で暮らしてきた先住民のテリトリーまでをも組み込むように、ツーリズム空間は年々、拡大の一途をたどりつつある。

マレーシアが国際的に主要な観光目的地となりえた要因は、ひとえに観光・集客資源の多彩さにあると言えよう。すなわち、熱帯の自然的豊かさ（tropicality）、マレー・華人・インド系などの「三大種族」をはじめとする多様な民族文化（multi-ethnicity）、ポルトガル・オランダ・イギリスによる植民地支配の経験と移植された西洋文化（historicality ／ coloniality）、それら土着・外来文化の混淆性（hybridity）、そして、これらのさまざまな要素が織りなす各地の場所性（locality）が、マレーシア各地の特徴ある観光地化を促してきた（藤巻 2014）。また、2000 年に東マレーシアのキナバル国立公園と

グヌン＝ムル国立公園が世界自然遺産に登録された後、2008年7月には旧植民地都市のマラッカとジョージタウン（ペナン）が「マラッカ海峡の歴史都市」として世界文化遺産に登録されて以降、「東洋と西洋のクロスロード」、「東西文化が融合する街」を惹句とする遺産観光が国内外を通じてマレーシア観光熱をよりいっそう沸騰させることになった。加えて、連邦政府観光局（通称「ツーリズム＝マレーシア」）のみならず各州の政府観光局や観光産業などの観光セクターは、海外からのツーリストのさらなる呼び込みをはかるべく、スポーツや「食」、アートなどをテーマにしたさまざまなイヴェント（兼）観光、MICE（兼）観光、医療（兼）観光など、新たな観光商品を生産してきた。さらには、ツーリズム・マレーシアの公式HPでは、植民地期の歴史的建造物が点在する街並みとともに、ペトロナス＝ツインタワーを主峰とする摩天楼街[1]が林立し、高架モノレールが快走するKLのスペクタクルな都市景観（cityscape）すら、国の「光」（国威）を「観」せる（「観光」！）、そして「インスタ映え」する熱帯のメトロポリスとして喧伝されている（写真1）（藤巻2009b；2010a）。

Ⅱ　研究の目的・方法

過去30年近く、KLやペナンなど半島部マレーシアの各地を訪れてきた筆者にとって、2000年代以降におけるインバウンドツーリズムに湧く同国の変貌ぶりには驚嘆するものがある。と同時に、＜観光の現場の風景＞に見え隠れする諸事象から、現代マレーシア社会が直面する諸課題も読み取れる。例えば、空港や自動車道、観光施設、ホテルの建設など、観光空間の生産・開発にともない、それまで空閑地でのスクォッティング（squatting）が黙認されてきた都市貧民や、ゴムや油やしのプランテーションの中で数世代にわたって就労してきたインド系労働者家族の追い立て問題があげられよう（藤巻2001；2006b）。また、何世紀にもわたって父祖伝来の密林に暮らしてき

写真１：熱帯のメトロポリス クアラルンプルの都市景観（cityscape）
（2017 年 9 月 9 日、筆者撮影）
ペトロナス＝ツインタワーを中心とする KLCC という摩天楼街がクアラルンプルの景観を際立たせている。

たオランアスリ（マレー半島の先着・先住民族）の生活空間が観光空間に組み込まれ、「彼ら」がエスニック観光の対象となることによって生ずる倫理的問題である（藤巻 2009a：2010b）。さらに、世界遺産に登録されたマラッカやジョージタウンでは、ツーリズムの沸騰を好機とした投機目的のジェントリフィケーションが進行したため、数世代にわたって長年住み慣れた現住地のショップ＝ハウスから他所に立ち退きせざるを得なくなった地元民が続出した。植民地期より築き上げられてきた多民族共生的生活世界が、急速な大衆観光地化によって、その場所の＜真正性＞を喪失しつつある状況は、ニューヨークの生きられた空間論を展開したシャロン＝ズーキンの評論『都市はなぜ魂を失ったか　ジェイコブズ後のニューヨーク論』（2013）を彷彿させるかのように、看過できない社会問題となっている（藤巻 2015;2016）。

こうした一連の研究との関りのなかで、この小論では、マレーシアを訪れ

る外国人の半数以上が観光目的地としている首都 KL の＜観光の現場の風景＞からうかがい知ることのできる＜マレーシア＝ジレンマ＞について考察を加えることとする。なお、このエッセイは、これまでと同様に＜ジオグラファー×フォトグラファー＞的目線での＜遊歩者（フラヌール）＞的観察や、ツーリスト・地元民・外国人労働者に対するインフォーマルインタビュー（エスノグラフィー的方法)、そして新聞記事や Web 上のブログなどを素材としたツーリストや地元民、ジャーナリストなどによる外国人労働者に関する言説の分析によるものである。

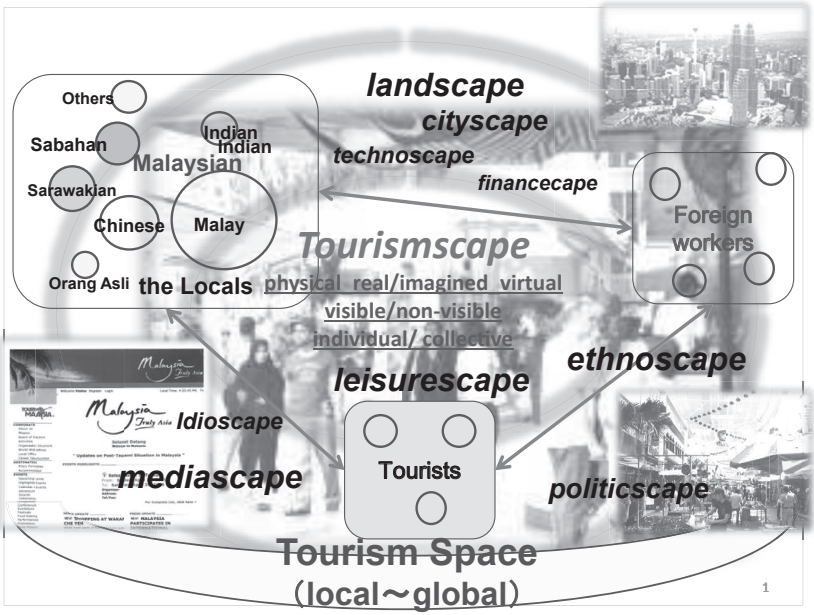
Ⅲ　ツーリズムスケープ

本論に入る前にまず、この小論の副題に掲げられている＜ツーリズムスケープ＞（tourismscape）という用語についてふれておきたい。＜ツーリズムスケープ＞は、これまでの拙稿でもしばしば使用してきた、筆者自身未だ精緻に定義し、説明しきれていない未成熟な概念用語ではあるが、ヒト・モノ・資本・情報などのトランスナショナルな移動によってグローバル社会の現れ方を際立たせる 5 つの次元の文化フローについて言及した人類学者のアルジュン＝アパデュライ（Arjun Appadurai 2004［1990］）の所説にヒントを得た筆者による造語である。

アパデュライは、現代グローバル化のフォーメーションを個人から多国籍企業に至るさまざまなレベルの行為主体（アクター）によって想像される＜エスノスケープ＞（ethnoscapes)、＜メディアスケープ＞（mediascapes)、＜テクノスケープ＞（technoscapes)、＜ファイナンススケープ＞（financescapes)、＜イデオスケープ＞（ideoscapes）による新たな空間の編成過程としてとらえようとした。この彼の＜スケープ＞（scape）論は、現代の国際ツーリズム現象を理解するうえで有用であると考えられる。多様なアクターによる介入・相互作用が織りなす重層的・複合的な＜メタ景観＞と

も言うべき＜観光の現場の風景＞を解釈し説明するうえで、なによりもツーリズムこそグローバル化のフォーメーションを代表する潮流（フロー）であるからにほかならない。国際ツーリズムが展開する空間あるいは目的地は、ヒト・モノ・資本・情報というトランスナショナルな＜フロー＞の結節点であるとともに、観光者（ゲスト）や彼らを迎え入れる観光地（ホスト社会）、そしてメディアを含む多様な観光産業、インバウンドツーリズムの成長を主導するさまざまな次元の政府など、多様なアクターが相互に影響を及ぼし合うイターフェースであるからだ。とりわけ、アパデュライが、現代グローバル化の主要な＜フロー／スケープ＞としてみなしている＜エスノスケープ＞が、集団的ないし個人的な移動によって受入れ先の国家に対して影響を及ぼしている外国人労働者、移民、難民とともに＜旅行者＞のランドスケープを含意していることからしても（アパデュライ 2004: 70）、＜ツーリズムスケープ＞という考え方は、彼の＜スケープ論＞に密接に関係づけられると言えよう。というよりもむしろ、多様なアクターによる＜フロー／スケープ＞によってツーリズムが、そして観光の現場が構築、編成されていることをふまえれば、アパデュライのいう５つの＜スケープ＞論を超えて＜ツーリズムスケープ＞は、＜レジャースケープ＞（Cartier 1998）などツーリズムに関わる、（したがって際限がないほどに）より多くの＜フロー／スケープ＞によって織り合わされている（相互に乖離・連接し合う）、＜メタ景観＞（Metascapes）とも解されるのである（第１図）。

実際、観光の現場に身を置き、現前する風景を眺め、＜ジオグラファー×フォトグラファー＞的まなざしを向けるとき、実感／幻視／想像されるのは、さまざまな観光・集客施設などの物質的で可視化される観光の現場で構築されている＜ランドスケープ＞（landscapes）にとどまらず、ツーリストや観光事業者、ローカルの人々、（後述する）観光・ホスピタリティ部門に従事する外国人労働者、メディア、＜観光の現場＞に関する Web 上での多声的言説など、多様な行為主体が相互に作用、影響しあう風景にほかならない。



第１図
＜メタ景観＞としての＜ツーリズムスケープ＞概念図

こうした、観光の現場に現前する、物質的／想像的に、知覚／想像される＜メタ景観＞を筆者は＜ツーリズムスケープ＞と呼びたい。

Ⅳ　「チャイナタウンはもはやチャイナタウンではない！」

ツーリズム＝マレーシア（マレーシア政府観光局）の海外向けのキャッチコピーによれば、KL はマレー・中国・インド系など、カラフルな民族文化、旧植民地都市という東洋と西洋の文化が融合する歴史都市とピクチャレスな近代都市というさまざまな要素が共存･融合する、”Truly Asia” が凝縮された「常夏の緑濃き美しい庭園都市」ということになろう。1981 年から約 20

年にわたって第4代首相を務めたマハティールの政権下において、KLの改造プロジェクトと美化政策は、不衛生でゴミゴミとした熱帯の開発途上国都市から「美しい庭園都市」に改造し、＜ワールドクラス＝シティ＞[2)]に昇格させたいという国家の威信をかけた壮大な企図にほかならなかったが、それは国際的な会議やイヴェントを誘致するとともに、国際的なインバウンドツーリズムの目的地にすることを企図した戦略でもあった（藤巻2009b）。

既述のように、シンガポールなど近隣のASEAN諸国のみならず、中国、インド、日本、イギリス、オーストラリアそして中東諸国などからの外国人ツーリストの流入は、たとえ通過者（フロー）もしくは短期滞在者にすぎないとしても、イギリス領マラヤ時代以来、本来的に多民族都市としての歴史を有すKLの場景をよりいっそう＜コスモポリタン＞なものにしている。実際、諸外国からのツーリストが一大繁華街であるブキット＝ビンタン（写真2）やチャイナタウン、ペトロナス＝ツインタワーがそびえ立つ新都心のKLCC（Kuala Lumpur City Centre）（写真3）などの観光スポットを周遊し、エアコンの効いた有名ブランド店がひしめくショッピングモールで買物をし、スターバックスやホワイトコーヒー（マレーシアのチェーン店）で一息ついている光景が日常化しているからだ（写真4）。

これらの観光スポットに加えて、KL市街地にはクラン川とゴンバック川の合流点に位置するマシジッド＝ジャメ（KL最古のモスク）、旧植民地政庁（スルタン＝アブドゥル＝サマド＝ビル）や国立モスク、旧KL駅などが位置するムルデカ（独立）広場界隈（写真5）、かつては生鮮市場としての歴史を有し現在はツーリスト向けの土産物店モールに改造されたセントラルマーケット、（旧）王宮（イスタナ＝ヌガラ）など、数多くの立ち寄り先が点在しているが、30～40年ほど前からガイドブックでKL観光の主要定番スポットとして推奨されてきたのは、「チャイナタウン」にほかならない（写真6）。

チャイナタウンは、19世紀半ば頃に、マラッカ海峡に面するスランゴール

写真 2：クアラルンプルの繁華街ブキット＝ビンタン
（2004 年 1 月 20 日、筆者撮影）
モノレールが快走し、看板広告が氾濫する風景。

写真 3：クアラルンプルの新都心 KLCC
（2013 年 3 月 15 日、筆者撮影）
ペトロナス＝ツインタワー階下の Suria KLCC（ショッピングコンプレックス）の庭園は摩天楼空間のオアシスとなっている。

写真 4：ブキット＝ビンタンのカフェでくつろぐ外国人ツーリスト

（2006 年 8 月 11 日、筆者撮影）

筆者は数年にわたって、同じカフェの同じ場所から、目の前を行き来する人々が互いに視線を交わす風景を撮影してきた。

写真 5：ムルデカ広場界隈のツーリスト

（2017 年 9 月 9 日、筆者撮影）

右手の建物は英国建築のビクトリア様式とイスラーム建築のムーア様式とが融合する 1897 年竣工のレンガ造りの建物であるスルタン＝アブドゥル＝サマドビル。左手は 1957 年に初代首相のラーマンが独立宣言を発したムルデカ（独立）広場。

写真 6：チャイナタウンの南ゲート
（2015 年 2 月 17 日、筆者撮影）

国の王都クアラ＝スランゴールより内陸に入った、クラン川とゴンバック川の合流点付近の密林に姿を現した錫の積み出し集落を起源とする。当初、ニッパやしで葺いた粗末な住居から成る村でしかなかったが、その後、華南の諸地域から到来した錫鉱山労働者（苦力）や華商などが集住する一大「唐人街」として発達した。KL は 1880 年にスランゴール国のスルタン所在地となり、さらに 1896 年にイギリス領マレー連合州の首府となって以来、マレー鉄道の要衝としても発展をとげ、1891 年に 1.9 万であった人口は 31 年には 11.1 万へと急増した。その間、全人口の 60％以上を華僑が占めたことからも分かるように、KL はイギリス統治下の華人街として成長してきた歴史を有している（藤巻 2009c）。

チャイナタウン界隈は、旧植民地政庁を中心とする官庁街とともに KL の金融・商業中心地区の役割をはたしてきたが、経済活動の中心は 1990 年代にはブキット＝ビンタンや、2000 年代には KLCC に移った。その一方で、狭い区域にショップ＝ハウスが密集するチャイナタウンは老朽化が進み、1980

年代半ばにUDA（都市開発公社）による再開発構想が打ち出されたが、地区住民の抵抗、その後の国際ツーリズムの高まりのなかで、この旧唐人街をKLの歴史遺産・観光資源として見直そうとする動きがおこり、ショップ＝ハウスの修景保存や同地区の美化プロジェクトが推進されるようになった。例えば、セントラルマーケットの改修や、突然襲ってくる驟雨の対策用にチャイナタウンの目抜き通りとも言えるプタリン通り（Jalan Petaling）をブルーの半透明の屋根で覆ったアーケード街に改造した（写真7）。そして、チャイナタウンの＜真正性＞を強調するかのように、草創期に華僑社会の頭目（カピタン＝チナ：Kapitan Cina）として活躍した客家系の葉亜来（ヤップ・アロイ）を顕彰して、プタリン通りを“Yap Ah Roy”通りとも呼ぶようになった（写真8）。

プタリング通りやハン＝ルキル通り（Jalan Hang Lekir）では、海賊版DVDや、高級ブランドの時計・カバン・アクセサリー・Tシャツなどの贋物（フェーク）を「公然と売る」屋台・露天が立ち並ぶ。それらが列をなす狭い通路を行き交い、ひしめきあう数多くの外国人ツーリストに向かって、売り子が英語やアラビ

写真7：チャイナタウンのアーケード街（プタリン通り）
（2015年2月7日、筆者撮影）

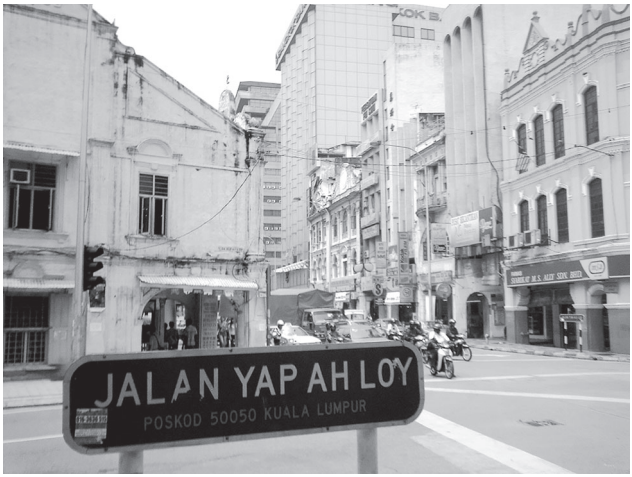


写真 8：Yap Ah Roy 通りの標識が立つチャイナタウン界隈
(2006 年 8 月 25 日、筆者撮影)

ア語、日本語などを巧みに使い分け、客引きする場景はチャイナタウンならではのものと言えよう。2000 年頃から、黒ずくめの衣服で全身をすっぽり包んだムスリム女性をともなう家族連れが目立つようになった。中東からのツーリストである(写真 9)。彼らが「メガセール」を目当てに大挙到来してくる 7 月から 9 月は、とりわけ、チャイナタウンがもっとも熱気で沸き立つ季節となる。

マレーシアにあって、インバウンドツーリズムが急成長をとげるようになった 2000 年代以降、チャイナタウンでは美化、アーケード街化など観光スポットとしての整備が進んだ。同時にチャイナタウンの<ツーリズムスケープ>において可視化されるようになった大きな変化は、屋台・露店の売り子や食堂の接客従業員が、これまで家族経営をしてきた地元の華人に代わって、バングラデシュ人やミャンマー人、イラン人など外国人就労者が増加したことであろう(写真 10)。こうしたさまをとらえて、KL 市民のみならず、外国人ツーリストからも「チャイナタウンはもはやチャイナタウンでは

写真 9：チャイナタウンで買い物を楽しむ中東からのツーリスト
（2004 年 8 月 18 日、筆者撮影）

写真 10：外国人ツーリストと外国人労働者とのインターフェースと化したチャイナタウン
（2004 年 1 月 22 日、筆者撮影）

ない！」（Web 記事①）といった揶揄する声があがるようになった。かつてのチャイナタウンは、華僑・華人によるエスニックビジネスの場であるとともに、「廟」や「会館」を結束の要とする彼らの＜真正な＞コミュニティであったが、「チャイナタウン」という＜場所名称＞だけが利活用されるだけの、＜真正＞なチャイナタウンではなくなってきているのだ。

しかも、チャイナタウンの北ゲート前を走るチェン＝ロック通り（Jalan Tun Tan Cheng Lock）などには、近年「リトル＝ネパール」、「リトル＝ミャンマー」と名づけされるほどに、ネパールやミャンマーなどからの食材や雑貨を売る店舗や食堂が目立つようにもなった（写真 11）。また、安価な料金のインターネットカフェ、国際電話がかけられるブースを備えた店、携帯電話の SIM カードや付属品を販売する店、両替・送金請負の店等々、いずれも、チャイナタウン界隈を訪れる外国人労働者を目当てにした店である（写真 12）。チャイナタウンの目と鼻の先に位置するバスターミナルのプドゥ＝ラヤ（Pudu Raya）やコタ＝ラヤ（Kota Raya）、LRT のパッサール＝スニ（Pasar

写真 11：外国人労働者相手の雑貨店
（2015 年 2 月 7 日、筆者撮影）

写真 12：外国人労働者相手の両替・送金請負店
（2014 年 3 月 17 日、筆者撮影）

Seni）駅やクラン（Kelang）バスステーション界隈には、日・祝祭日になると、買い物や友人との出会い、そして気晴らしも兼ねて、数多くの外国人労働者が KL 市内外の各地から集まってくる。そのため、チャイナタウンやその周辺は平日の街頭風景とは異にする、外国人労働者の群衆が行き交う熱気を帯びた喧噪の空間と化す。まるで、＜外国人労働者街＞が俄かに出現したかのように、である（写真 13・14）。

彼らの多くは郊外の工場や建設現場の宿舎、仕事先近くの狭隘なアパートで共同生活を送っている。彼らが集住する地区は、英字紙の *Sun*（2012 年 7 月 30 日付け）が報じているように、「ミニ = ジャカルタ」、「リトル = バングラデシュ」、「リトル = ハノイ」、「カンボジア村」、「アチェ村」、「ミャンマー市場」などと蔑称され、地元民から「外国人によって占領」されているとの脅威の眼差しが向けられているが（Husna Yusop 2012, 藤巻 2001; 2017）、こうした外国人労働者の群衆が、祝祭日には KL の街頭に出現し、可視化されるのだ。そして、その場に居合わせたローカルの人々やツーリストから、そ

写真 13：外国人労働者でごったがえすチャイナタウン界隈①
(2004 年 1 月 22 日、筆者撮影)

写真 14：外国人労働者でごったがえすチャイナタウン界隈②
(2004 年 1 月 22 日、筆者撮影)

してTVや新聞、Webを通して視聴者の心象風景の中で「街の秩序を乱す過剰存在」、あるいは「厄介者」として、＜排除＞の眼差しが向けられるのだ（藤巻 2007; Farhana Syed Nokman & Seri Nor Nadiah Koris 2013; Jayagandi Jayaraj & Priya Menon 2010; Nor Ain Mohamed Radhi & L. Suganya 2013; Seniors Aloud 2012）。

外国人労働者の群衆を目にするのは、表通りだけではない。チャイナタウンの南ゲート前のスルタン通り（Jalan Sultan）をまたいで、モノレールのマハラジャレラ（Maharajalela）駅に向かうプタリン通りをさらに歩くと、沿道には古ぼけた「旅社」や雑貨卸売り店が立ち並んでいるが、その界隈でも彼らの姿を目にするはずだ。そこは、昭和初期、アジアを放浪した金子光春が『マレー蘭印紀行』（中公文庫 2004）で「コーラルンプール」と題する章を設け、熱帯のけだるい異郷の地を描いているが、その頃の光景を彷彿させる通りである。金子光春以降、この地を訪れた作家として『アジア混沌紀行』（筑摩書房、1987年）の作者の立松和平や、『深夜特急』シリーズで名をはせた沢木耕太郎（『深夜特急＜２＞マレー半島・シンガポール』（新潮文庫、1994年）などがいるが、バックパッカーでもあった彼らが投宿したであろう安宿街は、今や外国人労働者相手の＜売春窟＞と化している。

表通りからは判然としないが、平日は人通りのない裏の路地では、日曜・祝日の昼過ぎともなると、外国人労働者が行き交い、薄暗い旅社の裏口を出入りする異様な光景を目の当たりにすることができよう。しかも路地には、ばら売りの避妊具や強壮ドリンク、興奮剤を仮設の台に並べ、KL市庁の係官による取り締まりを警戒しながら客待ちをしている商売人もいる、という近寄り難い光景を目の当たりにすることだろう（写真15）。

こうして、チャイナタウンという観光名所の＜スケープ＞から瞥見される際立つ特徴は、チャイナタウンという銘（めい）の＜真正性＞を喪失し、＜ゲスト＞としてのツーリストと、＜ホスト＞として接客する外国人労働者、そして余暇を過ごすためにやってくる外国人労働者という（一般にイメージされる観

写真 15：プタリン通りの旅社街の裏路地を行き来する外国人労働者
（2009 年 1 月 22 日、筆者撮影）

光地の風景とは異にする）アクターたちが集合する＜異種混淆的なインターフェース＞となっている点にあろう（写真 16）。であればこそ、事情通のタクシー運転手の口から、「チャイナタウンはもはやチャイナタウンではない！　外国人労働者の街だ！」などと揶揄されるのだ。そうした言説は、何もタクシー運転手だけから発せられるのではない。ツーリストや地元民によるブログや SNS 上でのつぶやきや語りを通して、世界中に発信、拡散されることになるのである（Web 記事②）。

V　＜ホスト／ゲスト＞論再考

これまで観光地におけるツーリスト（ゲスト）と彼らを迎え入れる社会（ホスト）との関係性をめぐる問題については、ヴァレン・L・スミス（2018＜ 1991 ＞）が提起した＜ホスト／ゲスト＞論を嚆矢として活発な議論がなされてきた。しかし、労働力の国際的移動が活発化する今日、ホスト社会が

写真 16：外国人ツーリストと外国人労働者とが＜すれ違う＞チャイナタウン
（2015 年 2 月 8 日、筆者撮影）

ローカルな人々によってのみ構成されているわけではないことは明らかである。ツーリズム・シーンにおいては、ホスト社会を構成する観光・ホスピタリティ部門の就労者に、ローカルな人々だけではなく、ホスト側に外国人労働者も含まれているという視点や論点を強く意識した議論が不可欠になっている実態があるのだ。つまりは、国際的労働力移動が進行し国際的ツーリズムが拡大するなかで、＜ツーリズムスケープ＞は、これまでの＜ホスト／ゲスト＞論を超えた視点で読み解かれねばならない状況がますます強まっている、ということである。しかも、外国人労働者が観光・ホスピタリティ部門における＜ゲスト＞ワーカーとして就労し、ツーリストに対しては＜ホスト＞側のワーカーとして接客するという二面性を帯びていることに加えて、KL のチャイナタウンの事例でも明らかなように、ある場面（例えば、祝祭日）の観光地・歓楽地においては、ツーリストと同様に、外国人労働者も余暇を楽しむ＜ゲスト＞としてふるまう（Web 記事②）、という実態があることを前提にした議論が必要となってこよう。国際ツーリズムの目

的地である観光の現場は、これまでのような＜ホスト／ゲスト＞論ではとらえきれない実相が顕在化しているのだ（インバウンドツーリズムによってにぎわい、人手不足が深刻化している日本においても同様の状況が顕在化しつつある！）。

Lee Guy は、1991 年当時、第 4 代首相であったマハティールが、2020 年までに先進国の経済水準に到達することを目指した国家長期計画（Wawasan 2020）を打ち出し、その実現に向けてさまざまな分野でのプロジェクトを展開するために、安価な外国人労働者を受け入れざるをえない状況をつくりだし、結果として、マレーシア社会は外国人労働者をめぐるさまざまな社会問題に直面せざるをえなくしたとして、マハティールの治政を厳しく指弾した（Lee 2004）。このことは、観光・ホスピタリティ産業部門および観光地における外国人労働者に関わる状況とも無関係ではない。外国人労働者は、インバウンドツーリズムの成長のために観光・ホスピタリティ産業を支える有用な労働力（ゲストワーカー）として受容（包容）されるべき役割を果たしているにもかかわらず、ローカルの人々から疎外され、社会秩序を乱す「ヨソ者」として＜排除＞の対象とされ、ツーリストからも疎んじられるアンビバレントな存在となっているという実態があるのだ。

この小論では、KL のチャイナタウンを例に観光の現場における外国人労働者をめぐる問題について言及したが、こうした状況は、KL のほとんどの繁華街や観光スポットでも同様なことが言えるのである。なぜならば、マレーシア、とりわけ KL の観光・ホスピタリティ部門などのサービス業は外国人労働者によって担われているからだ。例えば、ホテル、屋台や食堂・レストラン、カフェの従業員、フットマッサージ店のスタッフ[3]、ショッピングモールやホテルの警備員、観光農園の作業員など、さまざまな分野で数多くの外国人労働者が就労している[4]。そして、ショッピングモールのフードコートや屋台（街）で、ローカルフードを看板に掲げた店の調理場で料理をしているのは、見よう見まねで調理技術を身につけた外国人労働者である

ケースが多いのだ。日本食を売りにする店舗でも、そのいでたちを「日本風」にしながらも、実際に調理したり、接客しているのは（片言の日本語で応接する）ミャンマー人であったりする。ツーリストの視線からは、はっきりと識別されないまでも、実際には数多くの外国人労働者との出会いを経験しているのかもしれない。言い換えれば、外国人労働者（不法滞留者を含む）は、マレーシアの＜ツーリズムスケープ＞のなかに埋め込まれているのだ（藤巻 2010：59）。

2020 年に先進国入りを目指して経済成長をさらに加速させようとするマレーシアにとって、外国人労働者の果たす役割はますます大きくなろうとしている。しかし、ゲストワーカーとして＜包容＞されるべき彼らは、＜排除＞の対象ともなっている。こうした＜マレーシア＝ジレンマ＞とも言うべき現状を憂えて、外国人労働者の生活実態や彼らの肉声を地元社会に伝えようとしたのが、KL 出身のエスノグラファーであるムニアンディ（Parthiban Muniandy）の作品 *Politics of the Temporary: An Ethnography of Migrant Life in Urban Malaysia* (2005) にほかならない。ムニアンディが関心を払ったのは、バングラデシュ、ビルマ、ナイジェリア、パキスタン、インド、フィリピン、インドネシア、中東諸国からの出稼ぎ労働者（temporary migrants）であった。ムニアンディは説く、「彼らの数は、マレーシアの人口構成において大きな部分となっている。彼らはマレーシアの総人口 2900 万人において推定で 300 万人以上を、そして成人労働力の 20％を占めている。つまり、彼らは数の上で決して周辺的マイノリティではない[5)]。しかも彼らは、建設部門や農業部門のみならず、サービス部門に就労する割合が高まりつつあり、マレーシアの都市社会の日常生活ではありふれた存在となっている。例えば、食堂の料理人やカフェの給仕、深夜のチャイナタウンや公衆トイレの清掃人、携帯電話の売り子など、繁華街や観光スポットで就労する従業員の多くは外国からの出稼ぎ労働者たちであり、注意深く観察すれば、日常的に KL の街角の風景のなかに溶け込んでいる可視的存在なのである」、と

(Muaniandy 2005: 17)。

付記

この小論は、以下の発表や参考文献に掲げた拙稿をもとに著したものである。

・「『ツーリズムスケープ』―観光現象のメタ景観論的解釈―」("Tourismscape": A Metascape Approach for Tourism Studies) 第1回 観光学術学会大会(シンポジウム1「観光学の確立に向けて」)、2012年7月7日:和歌山大学

・「グローバル都市化するクアラルンプルのランドスケープ/エスノスケープ/ツーリズムスケープの変貌―その地誌的素描―」(The Changing Landscape, Ethnoscape and Tourismscape of Kuala Lumpur)、2018年人文地理学会大会特別研究発表、2018年11月24日:奈良大学

注

1) 2010年当時で、100m以上の高さを有すビルは244棟を数え、高さの合計(約3400m)では、世界第10位に位置づけられた。2017年現在、高さ200m以上の摩天楼(skyscrapers)は少なくとも31棟が確認されている。それらの多くはKLCCやKL Sentral駅近傍を中心に位置するホテル・コンドミニアム・オフィスを用途とするビルである。以上に加えて、現在建設中の200m以上のビルとしてPetronas Twin Towersを凌ぐ、Merdeka PNB 118(644m/116階), The Exchange 106(492m/106階)など約30棟がある。また30棟の建設プロジェクトもあり、将来、KLは200m以上の摩天楼が100棟以上、林立する都市となるものと予測されている。List of tallest buildings in Kuala Lumpur(https://en.wikipedia.org /wiki/List_of_tallest_buildings_in_Kuala_Lumpur, 2018年9月20日閲覧)、および各施設に関する個別Web情報、Emporis(世界のskyscrapers情報サイト)データによる。

2) GaWC World Cities Rankingによれば、1999年当時KLは、Gamma(γ)に格付けされていたが、その後Alpha(α)に格上げされている。J.V. Beaverstock et al. (1999) A Roster of World Cities, Cities, 16 (6), 445-458. およびhttps://www.spottedbylocals.com/blog/alpha-beta-and-gamma-cities/(2018年9月10日閲覧)、http://www.lboro.ac.uk/gawc/world2016t.html (2018年9月10日閲覧)による。

3) 外国人労働者のなかには、ミャンマー・ラカイン州のムスリムであるロヒンギャの人々も含まれている。国連難民高等弁務官事務所によると、マレーシアには合計15万7580人の難民が登録されており、このうち約半数の7万2490人がロヒンギャの人々である、という(UNHCR:2018年6月27日)。筆者がブキット=ビンタンのマッサージパーラーで出会った男性スタッフは、家族とともにタイ経由でマレーシアにたどり着いたロヒンギャ人であった。

4）新聞報道によれば、1993 年当時、合法的外国人労働者数は約 105 万人であったが、2003 年で 120 万人、2015 年では 200 万人、不法就労者を含めると 400 ～ 500 万に及ぶのではないかと推定されている。外国人労働者の主な就労セクターは、1990 年代後半では農業 30%、建設業 28%、ハウスメイド 23%、製造業 17%、サービス業 2%であった。産業構造の変動を反映するかのように、2010 年代においては製造業 35%、農業 25%、建設業 20%、サービス業 12%、ハウスメイド 9%へと変化をみせた。サービス業の急増は、都市部を中心に屋台・飲食店・ホテルなど、観光・ホスピタリティ部門の接客業従事者としての外国人労働者への需要の高まりを示唆するものである（藤巻 2017: 4）

5）これまでマレーシアの民族構成を語る際、マレーシアは「ブミプトラ（マレー系およびその他先住民族）・華人・インド系の三大種族から成る多民族社会である」と言われてきた。しかし、2016 年現在、マレーシアの全体人口 3170 万人のうち合法的在留者としての外国人（労働者）は、ブミプトラ（61.5%）、華人（20.9%）に次いで 10.3%を占め、インド系（6.3%）をしのいで「第 3 番目の種族」を成している。しかも、出生率の低さによって華人の割合が減少し続けていることから、2040 年推計には外国人（労働者）がブミプトラに次ぐ「第 2 番目の規模を有する種族」となるかもしれないと予測されている（ちなみにこの予測には不法滞留者は含まれていない）。Pook Ah Lek:The dilemma of having foreign workers in Malaysia,https://www.straitstimes.com/opinion/the-dilemma-of-having-foreign-workers-in-malaysia.（2018 年 10 月 1 日閲覧）

参考文献

アルジュン＝アパデュライ（門田健一訳）（2004）『さまよえる近代―グローバル化の文化研究―』平凡社、58-95 頁.（原著 Arjun Appadurai, “Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy”, *Public Culture* 2-2, 1990, 1-23: Chapter 2 in *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press、1996）

シャロン・ズーキン（内田奈芳美・真野洋介訳）（2013）『都市はなぜ魂を失ったか―ジェイコブズ後のニューヨーク論―』講談社.

藤巻正己（2001）「クアラルンプルの都市美化政策とスクォッター―新聞記事に描かれたスクォッター・イメージ―」（藤巻正己編著『生活世界としての「スラム」―外部者の言説・住民の肉声―』古今書院）60-93.

藤巻正己（2006）「グローバル化するクアラルンプル周辺地域のオランアスリ－半島マレーシア先住民社会の現在と彼らの場所をめぐるせめぎあい－」『立命館文学』593、69-91.

藤巻正己（2009a）「キャメロンハイランドのオランアスリ・ツーリズムの可能性―貧困克服のための半島部マレーシア先住少数民族観光をめぐって―」（藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光―他者理解の旅へ―』ナカニシヤ出版）147-163.

藤巻正己(2009b)「『マハティールの都市』クアラルンプル―生産されるスペクタクルなツーリズムスケープ―」『立命館大学人文科学研究所紀要』93、25-53.

藤巻正己(2009c)「グローバリゼーション時代の都市のランドスケープ・エスノスケープ―『マハティールの都市』クアラルンプルを読み解く―」(春山成子・藤巻正己・野間晴雄編著『朝倉世界地理講座－大地と人間の物語－3 東南アジア』朝倉書店)308-319.

藤巻正己(2010a)「ツーリズム[in]マレーシアの心象地理―ツーリズムスケープの政治社会地理学的考察―」『立命館大学人文科学研究所紀要』95、31-71.

藤巻正己(2010b)「ツーリズム・マレーシアに動員されるオランアスリ―必要に応じて可視化されるマレー半島の先住民族―」(江口信清・藤巻正己編著『貧困の超克とツーリズム』明石書店)215-248.

藤巻正己(2014)「マレーシアにおける遺産観光と利活用される植民地経験―再資源化されるコロニアリティ、ハイブリディティ―」(天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし―再魔術化される観光―』天理大学出版部)37-58.

藤巻正己(2015)「遺産観光ブームに沸くマラッカのツーリズムスケープ瞥見－過熱する観光開発・大衆観光地化・テーマパーク化－」(立命館大学地理学教室編『観光の地理学』文理閣)304-331.

藤巻正己(2016)「世界遺産都市ジョージタウンの変容するツーリズムスケープ－歴史遺産地区の観光化をめぐるせめぎあい－」『立命館文学』645、137-163.

藤巻正己(2017)「グローバル都市化するクアラルンプル―変貌する熱帯のメトロポリスのエスノスケープ―」(阿部和俊編『都市の景観地理 アジア・アフリカ編』古今書院)1-12.

ヴァレン・L・スミス編(市野澤潤平・東賢太朗・橋本和也訳)(2018)『ホスト・アンド・ゲスト―観光人類学とはなにか―』ミネルヴァ書房、バレーン・L・スミス編[三村浩史監訳](1991)『観光・リゾート開発の人類学―ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応―』勁草書房.

Cartier, C.(1998)'Megadevelopment in Malaysia: from Heritage Landscapes to "Leisurescapes" in Melaka's Tourism Sector', *Singapore Journal of Tropical Geography* 19(2), 151-176.

Farhana Syed Nokman and Seri Nor Nadiah Koris (2013) 'Foreigners flock to Kuala Lumpur', *NST*: 12 February 2013, http://www.nst.com.my/streets/central/foreigners-flock-to-kuala-lumpur-1.216489
(2013年2月15日閲覧)

Jayagandi Jayaraj and Priya Menon (2010) 'Foreign takeover in the heart of KL', http://www.thestar.com.my/story/?file= % 2F2010 % 2F3 % 2F19 % 2Fcentral % 2F5845342&sec=central, 19 March 2010(2015年6月10日閲覧)、

Husna Yusop (2012)' Klang Valley conquered by foreigners: study', *Sun*: 30 July 2012.

Lee Guy (2004) Globalization Dilemma: Immigrants in Malaysia, in Welsh, B. ed.: *Reflections: The Mahathir Years*, Johns Hopkins University, 417-425.

Michelle Chun and Dorothy Cheng (2013) 'Ubiquitous migrants in KL', http://www.thesundaily.my/news/61260, 14 February 2013（2013 年 2 月 15 日閲覧）

Nor Ain Mohamed Radhi and L. Suganya (2012) 'Foreign workers 'invade' city', http://www.nst.com.my/streets/central/foreign-workers-invade-city-1.36765, *NST*: 25 January 2012（2013 年 2 月 15 日閲覧）、

Parthiban Muniandy (2015) *Politics of the Temporary: An Ethnography of Migrant Life in Urban Malaysia*, Strategic Information and Research Development Centre.

Seniors Aloud (2012) 'Foreign Invasion of Downtown KL', Nov 18, 2012 http://seniorsaloud.blogspot.jp/2012/11/foreign-invasion-of-downtown-kl.html（2013 年 2 月 15 日閲覧）

Web 記事

① Chinatown - Kuala Lumpur: Traveler Reviews, 'China town with many foreign workers', 11 November 2011, http://www.tripadvisor.co.uk/ShowUserReviews-g298570-d447384-r120479670-Chinatown_Kuala_Lumpur-Kuala_Lumpur_Wilayah_Persekutuan.html（閲覧日：2013 年 2 月 21 日）

② 'Locals, tourists and foreign workers throng KL during Raya', http://www.nst.com.my/latest/locals-tourists-and-foreign-workers-throng-kl-during-raya-1.127131, 20 Aug. 2012（2013 年 2 月 15 日閲覧）